

■ 書評

書心畫（画）也

夏石番矢・鎌倉佐弓共著『100 Haiku/百俳句』サイバーウィット・ネット社、インド、ISBN 978-81-8253-649-4、二〇一六年

清水国治（日本）

おもしろい試みのなされた句集が発刊された。夏石番矢・鎌倉佐弓共著『100 Haiku/百俳句』である。おもしろい試み、という意味は書と句が組み合わされているからで、このような組み合わせの句集は今まであるようで実は無かったのではと思う。各ページには、句が日英で表記され、色紙の画像がページの下部にレイアウトされている。夏石氏の淡彩を施した書と鎌倉氏の模様入の色紙が全編に渡っているため、彩りがあり、あたかも絵本のような印象を与える。なるほど、こういうまとめかたもあるのか、と感心した。

書は心の画である、と中国の文人・学者であった揚雄^{ようゆう}が『法言』という著書の中で述べている。書にはそれを書いた人の内面が現れる、というわけだ。句自体は人の内面を表現したものだが、写植になった句と手描きの句を合わせると、俳人のより深い内面が味わえるのではないだろうか。そういうおもしろさも、この句集は提供していると思う。

とは云っても、句や手描き文字だけで人の内面をすべて表現できるわけではないのだから、この句集を通して両俳人の性格や人間性までも推測しようという訳ではないし、この小論の目的でもない。私の関心はむしろ、表現者の作風というもの、その人の書を観ることによりどのように感じられるか、という点だ。「感じ」なので私の主観で論を進めることにする。

俳人を畑に例えてみる。句には、一句一句に異なる思いが込められて、俳人が折々に感じたこと、インスパイアされたことなどが句という形で表現されている。それは、それぞれの畑からいろんな作物が育っているということだ。畑には折々に新しい肥料が施されるだろう。地質も改良されるだろう。そして、異なる作物が育つことになる。

それでは、畑そのもの、あるいは畑を構成している土そのものはどのようなものだろうか。土には俳人固有のものがあるのではないかと考える。夏石氏の句は夏石氏固有の土から育ち、鎌倉氏の句も鎌倉氏の固有の土から育つ。そして、それぞれの土がどのようなものなのかを、それが部分的であっても語っているのが書でないか、と私は感じる。

夏石氏の書は、たとえば、「海底の蛸が友だち空飛ぶ法王」の蛸がその太い足でのたうちまわっているような感じだ。あるときは軽やかに跳ね、あるときはどしどしと留まる筆のストローク。ダイナミックで生命感に溢れている。「滝を吹き割る」エネルギーがそこにある。そのエネルギーは、夏石氏が詠むさまざまな句に流れているのではないか。芭蕉は、戯れ言のような俳諧を一つの詩の形態として確立するために多大なエネルギーを注ぎ、蕉風を打ち立てた。夏石氏は、季語に代わるキーワードを提案するなど、さまざまな新しい試みを実行し、井の中の蛙のようになりつつある日本の俳句の流れを「吹き割る」努力を続けている。俳句がハイクとして世界に広がりつつある現在、「太平洋上ことばからことばへ虹」にあるように世界俳句という大きな理想に向かって邁進している。日本国内で確立された蕉風に、世界を相手にした新たな伝統を加えようという意気込み、その姿勢とエネルギーが書に現れていると感じる。

夏石氏の書を日本古代の土器に例えると、縄文様式のものにあたるとも思えない。同じ例えを用いるなら鎌倉氏の

書は、弥生様式であろう。縄文の荒々しい形に代わって、シンプルで穏やかな感じを与えるのが弥生様式だ。鎌倉氏の書は、一文字ずつ丁寧に、そしてシンプルに書かれている。色紙を書くのは苦手だ、と氏がブログに書いているので、おそらく大変な集中力をもって書いたのであろう。淡い色のボカシや模様が入った色紙を使っていて、それが穏やかな感じを醸し出している。縄文土器が、どこか神具のような印象を与えるのに対して、弥生土器は日常の家事で使うもの、という感じがある。鎌倉氏の詠む句にはそんな日常に光を当てたものが多いように思う。そして、その日常は光があたって、「影より羽音」が聞こえたり、「待つことがきらきら」したり、「青が歌う色」であったり、「歩けば二分 走れば」十秒、でなくて「春」になったり、「枯木立」の合間に「永遠」を見そうになったり、というふうに、すばらしく変容するのだ。うっかりと流れていく日常に、このような光を与えていくには、大変な集中力が必要なのでは、と思う。鎌倉氏の日頃のそんな姿勢が書に反映されているのではないだろうか。

以上、両氏の「土」について書いてきたが、自分に振り返って考えてみると、自分の「土」がどうもよく分からない。元々左利きであったこと、帰国子女のような境遇であったことが理由で書というものは、私は苦手である。私がつくる俳画には手の痕跡が希薄なものが多い。手描きのイラストや筆描きのストロークを使うこともあるが、書と云えるものではない。絵描きの場合は、書以外のなにか別のもので心の内面を推測するしかないのかもしれない。

『100 Haiku』：<http://www.cyberwit.net/publications/840>